

乳房再建手術体験者の語り における自己イメージ と楽観主義

○いとうたけひこ¹⁾ 山崎 創²⁾
渡邊愛祈³⁾ 井上孝代⁴⁾

¹⁾和光大学現代人間学部

²⁾四谷ゆいクリニック

³⁾明治学院大学大学院

⁴⁾明治学院大学心理学部

キーワード: 乳がん、自己概念、病いの語り、
原因帰属、探求の語り、回復の語り

日本応用心理学会第78回大会

ポスター発表2 臨床・相談 11P-21

90cm*180cm

信州大学人文学部棟 204演習室

2011年9月11日9:30-11:30

責任在席時間9:30-10:30



いのちの乳房

「乳がんによる「乳房再建手術」にのぞんだ19人



写真 荒木経惟
企画 STAFFプロジェクト



【問題】①乳房再建手術とは

- 乳房再建手術とは乳がん切除後の乳房を再建する手術であり、乳房温存手術とともに形態温存手術として「整容性を温存できる」治療法として近年増加してきている(久留宮ほか, 2010)。
- ○久留宮康浩, 長谷川洋, 坂本英至ほか: 一期的乳房再建手術が乳癌の治療体系に及ぼす影響 日本外科学会雑誌 111(臨時増刊号_2), 562, 2010.

【問題】② 患者の自己概念の変容

- 砂賀・二渡(2008)は、2名の乳房再建手術の患者にインタビューを行いライフストーリーの視点から、自己概念の変容について次の4つを仮説生成的に説明している。
- ○砂賀道子, 二渡玉江: 乳がん体験者の自己概念の変化と乳房再建の意味づけ. 北関東医学会 58:377-386, 2008.
- まず第1は(1B)「乳がんであることを人には言えない」というテーマである。ここで焦点になるのは人間関係(関係性の苦痛)である。それとともに、「乳がんになったことで女性としての価値が失われ、思い描いていた自己実現が果たせないのではないかという否定的な自己概念」と考察している。

- 次に第2は(2)「手術と乳房喪失・変形へのコンプレックスとの間の揺れ動き」というテーマである。これは「病気の進行に対して最善の治療であると確信したはずの手術と、それによって大きく変化するボディイメージや自己の喪失感との間で揺れ動く自己概念」として説明している。
- さらに第3は(3)「乳房再建への期待」というテーマである。これは「自己概念の大きな揺らぎを体験しながら、喪失や変化を補う最善の方法として乳房再建に期待する」と説明されている。
- 最後に第4は(4A)「乳房再建によって取り戻した自分らしい生き方・自信の獲得」というテーマである。これは「乳房再建によって自分らしい生き方を取り戻し、女性としての自信を回復させ、肯定的な自己概念を形成する」とことであると説明している。

【問題】③自己概念の仮説の拡張

- われわれは、荒木(2010)の19人の乳房再建手術の成功患者の巻末の手記を読んだところ、自己概念の変容は第5と第6のテーマも導けるといふ仮説を立てた。
- すなわち第5(1A)は、「乳がんに関わる苦痛」というテーマである。そもそも苦痛には、身体的苦痛・心理的苦痛・関係的(社会的)苦痛・スピリチュアルな苦痛の4種類が考えられる。乳がんそのものに対する苦痛だけでなく、抗がん剤の苦痛や副作用で髪が抜けるなど様々な苦しみが含まれていることから1Aの名前を「乳がんに関わる苦痛」とした。しかし、苦痛には不安や絶望、混乱などの内容も含まれており、単なる身体的苦痛だけではない。関係的な苦痛とスピリチュアルな苦痛は第1のテーマ(1B)で述べられているので重複を避けるために、身体的な苦痛とそれに伴う生きる苦しさ^{2015/7/1}に焦点をあてる。

- さらに第6として新しく(4B)「生への感謝(生きることの再発見)」というテーマが建てられるのではないだろうか。これは第4のテーマ(4A)の内容とも近い。しかし、第6として提起するわれわれの概念は、スピリチュアルなテーマである。第4(4A)はマイナスの状態からかつての状態あるいはそれ以上に回復したことが中心である。
- これに対して、われわれの提起する第6はむしろ、以前と異なったプラスの新しい意味のもとでの生き方であり、再生に加えて新しい価値の生成やがん以前のそれまでとの生活からの超越などを示している。これはFrank (2002)のいう「探求の語り」に該当すると考えられる。したがって、仮説として、1A、1B、2、3、4A、4Bの6種類のカテゴリに分類することが可能であると考えた。
- ○アーサー・W・フランク, 鈴木智之(訳): 傷ついた物語の語り手—身体・病い・倫理. ゆみる出版 2002.

【方法】



- **研究対象**: 荒木(2010)は乳房再建手術の体験者19名の写真集である。その巻末に、写真のモデルとなった女性の体験記が「モデルさんたちの声」として、一人1ページの分量で、プロフィールとともに述べられている。これを研究対象とする。
- **分析手続き**: (1) 19人の体験記をテキストファイル化した。(2) 体言止めの文の述部を加えるなどの文章の補正を行った。(3) 日本語は「トピック―コメント」構造が文の形式に対応している。この点により、英語のように「主語―述語」が明確でない文が多い。したがって、意味のまとまりで節 (phrase = コメント) ごとに分けた。結果、599コメントが得られた。(4) これらの各コメントごとに、6カテゴリに該当するかを評定し、該当しないものをNAとした。

【結果と考察】自己概念

- 6つのカテゴリに分類できたのは179コメントであり、全体の29.9%であった。自己概念以外には、事実経過やソーシャルサポートの内容が多かった。二渡・砂賀(2008)の1Bから4Aの4つの自己イメージについてのコメントが全体の約4割を占めた。1Aが約3割、4Bが約4割のコメント比率であった。6カテゴリ内のコメント数は1Aと4Bが多かった。1Bが少なかったのは、写真集のモデルになることも辞さないという積極的な生き方を選んだ研究対象者の特徴と関連しているだろう。

表1 自己概念の各カテゴリのコメントの合計

カテゴリ	1A	1B	2	3	4A	4B	合計
コメント数	57	1	14	31	23	53	179
(%)	31.8	0.6	7.8	17.3	12.8	29.6	(100)

【文献】

- ○荒木経惟(写真), STPプロジェクト(企画):いのちの乳房—乳がんによる「乳房再建手術」にのぞんだ19人. 赤々舎 2010.
- ○アーサー・W・フランク, 鈴木智之(訳):傷ついた物語の語り手—身体・病い・倫理. ゆみる出版 2002.
- ○久留宮康浩, 長谷川洋, 坂本英至ほか:一期的乳房再建手術が乳癌の治療体系に及ぼす影響 日本外科学会雑誌 111(臨時増刊号_2), 562, 2010.
- ○砂賀道子, 二渡玉江:乳がん体験者の自己概念の変化と乳房再建の意味づけ. 北関東医学会 58:377-386, 2008.
- ○渡邊愛祈・いとうたけひこ・井上孝代 乳房再建手術体験者の楽観主義的説明スタイル:CAVE法(説明スタイルの逐語的内容分析)によるナラティブの分析 日本教育心理学会第53回総会発表論文集,529. 2011.